

Yokohama Triennale 2014 Pre-event

A Case Study on Educational Programs of Asia Pacific Triennial of Contemporary Art in Australia

Kids' APT: Connecting Contemporary Art and Kids

Document

ヨコハマトリエンナーレ2014 プレイベント
オーストラリア発、国際展における次世代教育普及プログラムの事例紹介
「現代アートと子どもをつなぐキッズAPT」
記録集



- 02 開催概要／タイムテーブル
- 05 第1部：プレゼンテーション
「キッズAPT：アジア・パシフィック・トリエンナーレにおける子どものためのプログラムの事例紹介」
- 11 第2部：横浜の取り組み紹介
「横浜トリエンナーレと横浜美術館による教育プログラムへの取り組み」
- 18 第3部：意見交換
- 16 来場者アンケート
- 18 Pre-event Outline / Timetable
- 20 Part 1 Presentation “Kids’ APT: A Case Study on Educational Programs of Asia Pacific Triennial of Contemporary Art in Australia”
- 25 Part 2 Introducing Education Programs in Yokohama “Yokohama Triennale and Yokohama Museum of Art”
- 26 Part 3 Discussion
- 30 Audience Feedback

「現代アートと子どもをつなぐキッズAPT」開催にあたって

アジア・パシフィック・トリエンナーレ (APT) は、オーストラリアのクイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート (QAGOMA) を拠点に、アジア・オセアニア地域の現代アートを紹介する国際展として1993年に第1回を開催して以降、この地域の美術を展示・収蔵するとともに、来場者向けのプログラム、なかでも子どもを対象とした「キッズAPT」に1999年より力を入れています。

横浜トリエンナーレでは、QAGOMAよりサイモン・ライト氏を迎え、第5回展 (2014年) のプレイベントとして2013年3月8日 (金) に「現代アートと子どもをつなぐキッズAPT」を開催。国際展における次世代教育普及プログラムの事例として、APT、横浜美術館、横浜トリエンナーレでの教育プログラムの取り組みについてご紹介しました。また、来場された学校関係者、教育普及担当者からも教育現場における日常的な課題や疑問が投げかけられ、APTでの具体例や課題についても共有されました。本書はその記録をまとめたものです。

[開催概要]

日時：2013年3月8日 (金) 19:00-21:00

会場：横浜美術館 子どものアトリエ

主催：横浜トリエンナーレ組織委員会、横浜美術館

[タイムテーブル]

19:00 主催者あいさつ

逢坂恵理子 (横浜美術館館長、横浜トリエンナーレ組織委員会委員長)

19:05 第1部 プレゼンテーション「アジア・パシフィック・トリエンナーレにおける子どものためのプログラムの事例紹介」
サイモン・ライト (クイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート プログラム担当アシスタントディレクター)

19:40 第2部 横浜の取り組み紹介「横浜トリエンナーレと横浜美術館による教育プログラムへの取り組み」
関 淳一 (横浜美術館 教育普及グループ長)

20:00 第3部 意見交換

司会：帆足亜紀 (横浜トリエンナーレ組織委員会事務局長)

20:45 閉会

注1) 事業名の総称および組織名は「横浜トリエンナーレ」(横浜=漢字表記)、第5回展の事業名は「ヨコハマトリエンナーレ2014」(ヨコハマ=カタカナ表記)となります。

注2) 本書の所属、肩書きは全て2013年3月8日現在のものです。





サイモン・ライト
クイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート プログラム担当アシスタント・ディレクター



逢坂恵理子
横浜美術館館長、横浜トリエンナーレ組織委員会委員長



関 淳一
横浜美術館 教育普及グループ長



司会：**帆足亜紀**
横浜トリエンナーレ組織委員会事務局長

第1部：プレゼンテーション

「キッズAPT：アジア・パシフィック・トリエンナーレ における子どものためのプログラムの事例紹介」

逢坂恵理子(以下、逢坂) | 皆様、こんばんは。金曜日の夜、こんなにたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。

今日は、オーストラリアのブリスベンにありますクイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート(以下、「QAGOMA」という。)から、サイモン・ライトさんをお迎えしました。アジア・パシフィック・トリエンナーレ(以下、「APT」という。)は、QAGOMAで開催されている3年に一度の国際展ですが、そのなかで、キッズAPTという子どものための特別なプログラムを1999年から展開しています。通常国際展の話といえますと、現代美術のアーティストの話や今どういう傾向が注目を浴びているかという話になるのですが、今回は子どもに現代美術をどのように伝えていくかということも含めまして、非常に貴重なお話が聞けるのではないかと思います。

私自身1999年のブリスベンで開催されましたAPTに参加しまして、子どもたちがギャラリーの一角で非常に楽しそうに色々なことをしているのを見て、国際展でこういう可能性もあるのだなと思ったのですが、当時は日本はまだまだそこまで到達しないと思っていました。

美術館で子どものためのプログラムを行うには、色々なメリットや課題もあると思いますので、現場で多様な経験を積んでいらしたライトさんから、そうしたことをお聞きすることができる、またとない貴重な機会だと思います。今日は、2時間ほどになりますけれども、最後までお付き合いいただければと思います。よろしくお願いたします。

帆足亜紀(以下、帆足) | それでは早速ですが、サイモン・ライトさんのプレゼンテーションに移りたいと思います。

ライトさんは現在QAGOMAのプログラム担当、アシスタント・ディレクターをされています。昨年着任されるまでにこちらの美術館のほかに、グリフィス大学のアートギャラリーのディレクターやプライベートコレクションなどさまざまな実績を積みまっています。実は教育普及担当だけではなくプロジェクトのマネージメントや協賛・協力の獲得、コラボレーションする相手を探したりというようなネットワーキングのご経験もあるということですので、その辺りの話も後で触れていきたいと思っています。

ライトさんには、QAGOMAが主催するAPTという国際展における「キッズAPT」という子どものプログラムについてのご紹介をいただきます。

ではライトさん、よろしくお願いたします。

サイモン・ライト | ご紹介ありがとうございます。

今は美術館の中でさまざまな年代層の来館者が自分たちなりの方法で美術の体験をしているのがごく当然のことになっています。物を作っている人もいるかもしれませんし、何かのパフォーマンスを見ていたり、トークに耳を傾けていたり、作品について考えていたり、あるいはオンライン上でインタビューやインタラクティブな作品キャプションなどを見ていたりすることもあります。また場合によってはSNSに自分たちの来場の様子の画像をアップロードしている人たちもいます。こういったことにより美術館の体験というのは、従来からの作家の声のみが一方向的に語りかけてくるという状況ではなく、極めて能動的な、今までになかったような鑑賞、体験を実現可能としています。

QAGOMAでは、子どもたち対象のプログラムのなかでも、コレクションを更に充実させていく上でも、また展覧会を実現させていくなかにおいても、現代美術が極めて重要な、圧倒的に注力すべき分野となってきました。そして、今までの最高記録の来館者数の記録をたたき出してきているのも現代美術関係の展覧会です。展覧会が人を惹きつけるのです。

今ご覧いただいているのが、ギャラリー・オブ・モダンアート(以下、「GOMA」という。)の入口になります(FIG. 1)。クイーンズランド州立美術館はここから100メートルほど離れた所にあります。

例えばAPTのように数年に1回、定期的に行われている重要な展覧会は多様な観客に対応する方策を示してきました。APTをはじめとする展覧会のなかで紹介した現代美術の作品は、間違いなく来館者の期待に挑み、また今までになかった体験を提供してきました。私たちは、観客が作品と直に触れ合い、また、参加することができるようにしたいと考えています。

現代美術の新たなオーディエンスとしての子どもたち

私たちは、現代美術にとって子どもというのが極めて重要な観客層になっていると認識しており、彼らを対象とするプログラムに取り組んでいます。

その結果、美術館の核となる事業と、アートと子どもを巡る領域について、さまざまな議論が沸き起こっています。それを見ていくことによって、私たちがアートについてどういうことを前提としているのか、また誰がそれに価値を見出しているのか、そして誰のためにこういったアートは作られているのかといった、さまざまなことが浮き彫りになります。

クイーンズランド州立美術館が、子どもや家族連れを特に重要視していこうと決めたのは1990年代後半のことでした。その当時、オーストラリア国内においても、また海外においてもその手本となる事例が非常に少ない時代でした。1988年以降、200万人以上の子どもが私たちの美術館を訪れています。

1990年代の後半において、美術館や博物館における教育というのは重要ではあるけれども、収集をしていくこと、そして展覧会を実現させていくキュレーションが先にあり、その後に位置付けられていました。しかし若い観客のためのプログラムを開始して15年目を迎え、私たちの美術館は国際的にこの領域においてのリーダー的な存在と認められるようになってきました。

クイーンズランド州立美術館における子どもを対象とするプログラムを開発するためには、まず美術館自体の文化を変えていく必要がありました。そのため何代にもわたり館長、マネージャー、教育普及担当者、キュレーター、そしてデザイナーたちが多大な努力と挑戦を重ねてきました。美術館の組織文化そのものが発展し、進化した結果、子どもや家族連れといった観客層は、他の層と切り分けて別の物とみなされるのではなく、今や戦略的な計画の一部となりました(FIG. 2)。



FIG. 1 Visitors to 21st Century: Art in the First Decade, GOMA, 2010-11



FIG. 2 Visitors to The 7th Asia Pacific Triennial of Contemporary Art, QAGOMA, 2012-13

GOMAが2006年に開館して以来、チルドレンズ・アート・センターは、二つの展示空間を占めていますが、その存在は美術館全体にも影響しています^[FIG. 3]。プロジェクトを通じて意識的に子どものための作品と大人のための作品の境界線を曖昧にすることで、全体を一体化させています。

アーティストや観客と協働していく中で、チルドレンズ・アート・センターはいくつかの基本的な理念を見出すようになりました。大きく分けて次の通り三つあります。

1. 積極的な参加によって、幅広い現代の思想や文化に直接触れ、知的好奇心を刺激することができる
2. 現代アーティストの考え方というのは非常に純粋で訴求力があるため、子どもたちが世界各地の生活におけるアートと、その重要な役割について学ぶ一つの方法となる
3. 21世紀においてアート分野は今ままでなく拡大し、多様化している。これを通じて子どもたちは、この領域についてより広い理解と、未来における自分たちの役割への理解を深める

時代とともにデザインのイノベーションと職員の専門知識が大きく進化してきたなかで、チルドレンズ・アート・センターのプログラムとして変わらない要素がいくつか挙げられます。1点目は、アート作品と直接関係をつくることのできるような状況を実現させ支えていくということです。ここでは、作る、取り組む、そして解釈をするということに重点を置いています。2点目に、学ぶことを通じて楽しむ、ということを持っていきたいと思っています。視覚面でのリテラシーと理解力、そして問題解決力がポイントです。3点目は、多様な現代の思想と文化をもとに、子どもたちが自分たちの経験を最大限活かすことを可能にしていくということ。私たちは常に方向性を示していくということ、教えていくということ、そして自由に連想し、発想を広げていくことのバランスを探り続けています。

非常に簡単で実務的な取り組みも行っています。例えばアーティストが作品を作る過程を紹介し、アーティストという存在の謎に迫り、さらにハンズオン展示を通して直接的な関係を築くこと

で、より個人的なつながりを作っていくことも、我々の目的になっています。

私たちのやり方は想定していた以上の成果を出しています。チルドレンズ・アート・センターが進化していく中で、私たちのオーディエンス・エンゲージメント(観客との関わり方)のモデルは、子どもたちのみならず、全ての来館者の期待値に変化をもたらしています。全展示室に子ども用の解説カードを置いていますが、大人の方から、子どもはもちろん自分自身の体験にも役立った、という感想を多くいただいています。

子どもたちが美術館の大使に

今現在、定期来館者の多くは子どもたちですが、私たちにとつては大使のような存在です。親が子どもを連れてくるのではなく、子どもが家族を連れてきてくれるのです。

全ての企画を地域の教職員の方々に事前に体験してもらい、きちんと機能するか確認しています。昨年は来館者数全体の約20%が子どもでした。国際的に見ると、例えばイギリスでの平均は9%程度ですから、これは通常的美術館での数値よりもはるかに高く、実に異例な状況です。

子どものためのプロジェクトを企画する過程で、私たちは地域コミュニティや学校で事前調査を行います。そこでスタッフは新しい考えや教材を試し、自分たちが創り上げつつあるプロジェクトに対して、子どもたちがどのように反応するのかを実際に観察し、それを把握することができます。

つまり、アーティストと協力すると同時に、子どもとコラボレーションしています。子どもたちの反応というのは、フィードバックの仕組みの中において極めて重要な要素なのです。

このためチルドレンズ・アート・センターのプロジェクトは、現代美術の展覧会や作品の委嘱と同じくらい厳密に精査しています。要するに、展覧会をやった時これでうまくいくかどうかの一種の保険ともいえます。子どもは正直なので、うまくいかない時ははっきりとそう伝えてくれます。好きなものはただ気に入るのではなく、本当に心から好きになってくれます。



FIG. 3 Children's Art Centre, Level 1, Gallery of Modern Art

キッズAPTでの取り組み

ここで、第3回目のAPTについて話したいと思います。子ども対象のキッズAPTを初めて公開したAPTです。

ぜひご注目いただきたいのは、実際に体験した観客数の数です。時代とともに子どもたちの人数がどんどん増えていきます^[FIG. 4]。

1999年のキッズAPTというのは、私たちが子ども対象プログラムにおいて、いくつかの初の試みが実現した年です。まず、子どもが現代美術の国際展にとって重要な観客であるということを確認に認識しました。次に美術館として、子ども対象のプログラムがつけ足しではなくて、大規模な展覧会の中の重要な一部として作り込んでいかなければいけない、そういった必要性があるという認識が生まれたということ。そして、この時に初めて美術館として現代美術の作家に子どもたちを対象とした作品の制作を依頼しました。今では、こういった子どものために制作された作品の収集もしています。

1999年以降、今までに当美術館を訪れた子どもの実に4分の1近くに相当する動員をキッズAPTが担っています。そして、今日訪れている来場者の多くや、若い美術館スタッフの一部にも、学校の見学や家族と一緒に訪れたキッズAPTで初めてこの美術館を知ったという人たちがかなりいます。現在の来場者の多くはこのように子どもの時からずっと私たちの美術館と歩んできており、今や美術館は自分たちのものだと考え、この場所を自分たちの誇りとしてくれています。

APT3での目玉の一つとなった作品に、中国出身のアーティ

ストでニューヨークに拠点を置く、^{さいこつきょう}蔡國強(1957年中国生まれ)の作品があります。30メートルの竹で作った吊り橋の作品(Blue dragon & bridge crossing)を、ギャラリーの中のウォーターモールという空間に架けました。蔡國強とのコラボレーションで若い来場者が自分たちで橋を作るというワークショップを行い、何千人もの子どもたち、そして子ども以外の人たちがこれに挑戦し、マスキングテープと竹ひごを使って、かなり美しいものを作り出しました^[FIGS. 5, 6]。「あの橋は子どもには危険だ」と言う人も中にはいますが心配には及びません。ここから落ちたのは大人1人だけで、子どもは1人も落ちませんでした。

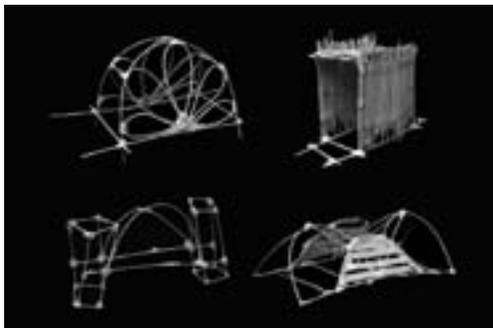
3年後のAPT4では、子どもも全体の来場者数も増えています。

これは皆さまご存知の草間彌生(1929年日本生まれ)の作品《The Obliteration Room》です。無から有を作りだし、有から無を作りだしていくプロジェクトでした^[FIG. 7]。ここでは25万個のドットを使用しました。映像技術やピクセル化の話も色々展開させることもでき、去年テイト・モダンで行われた草間彌生の回顧展「Yayoi Kusama」(テイトモダンにて、2012年2月9日～6月5日)でも取り上げられました。子どもの中には自分の体を水玉まみれにして、この草間の身体への取り組みを素晴らしく発展させた子どももいました。

第5回のAPTの来場者数は大きく伸びました。ただし、GOMAも第2会場として同時オープンしたこともあるので、純増ではありません。この時は子ども対象のバーミヤン・ドロイング・プロジェクトを実施しました。アフガニスタンの子どもたちがどういう生活を送っているのかが分かるように、カディム・アリ(1978年パキスタン生まれ)とアフガニスタンの子どもたちと一緒に絵を

FIG. 4 APT3～7の観客数の推移

	会期	開催月数	観客数	子どもの観客数	会場数
APT3	1999年9月9日～2000年1月26日	5か月	150,000人以上	16,700人以上	1
APT4	2002年9月9日～2003年1月26日	5か月	220,000人以上	44,400人以上	1
APT5	2006年12月2日～2007年5月27日	6か月	750,000人以上	192,445人	2
APT6	2009年12月5日～2010年4月5日	5か月	530,000人以上	130,000人以上	2
APT7	2012年12月8日～2013年4月14日	4か月	350,000人以上	83,500人以上	2



FIGS. 5, 6 Cai Guo-Qiang, Blue dragon bridge crossing / Kids' APT3, 1999

描いてブリスベンの子どもたちに送りました^[FIG. 8]。

見ての通りアイデアの段階からアーティストやキュレーターだけでなく、デザイナーや設計者を巻き込んで進めています。

キッズAPT6ではシラナ・シャバジ(1974年イラン生まれ)というアーティストのプロジェクトを行いました。子どもたちに地元のさまざまなフルーツや野菜を使って静物画の構図を作ってほしいと頼みました。これをアーティストに送り、アートセンター用に作品化してもらいました^[FIG. 9]。静物画のワークショップも行いました。

これは家にある素材をリサイクルすることに重点を置いたイザベル&アルフレド・アキリザン(1965年/1962年フィリピン生まれ)のプロジェクトです^[FIG. 10]。子どもたちには、使い道のなくなった日常的なものを持ってきてほしいと頼みました。

そしてAPT7は現在も進行中ですが、現在(2013年3月8日現在)まで

に35万人以上のお客様をお迎えしています。そのうち子どもの人数は約83,500人です。

これはアボリジニの現代アーティストであるダニエル・ボイド(1982年オーストラリア生まれ)です^[FIG. 11]。オーストラリアのアボリジニ・アートはドットによって構成されているものと単純化されがちなのですが、ドットのなかには実にさまざまな意味が込められています。ダニエル・ボイドのインタラクティブな映像作品では、ドットの上を子どもたちが指でなぞると、その下から自分たちの姿が現れてきます。

これはベトナムのティファニー・チュン(1969年ベトナム生まれ)という作家です^[FIG. 12]。ここでは子どもたちに動物をグループ分けさせて、そのグループで何が起きているかを語ってもらい、さらにそれを展示して絵に描き、新しい物語を考えてもらいました。多



FIG. 7 Yayoi Kusama, *The obliteration room* / Kids' APT4, 2002



FIG. 8 Khadim Ali, *The Bamiyan drawing project* / Kids' APT5, 2006



FIG. 9 Billboard painter Sirous Shabaghi creating the mural in Iran / Kids' APT6, 2009



FIG. 10 Isabel & Alfredo Aquilizan, *In-flight (Project: Another Country)* / Kids' APT6, 2009



FIG. 11 Daniel Boyd, *History is made at night* / Kids' APT7, 2012



FIG. 12 Tiffany Chung, *One day the bird flies across the sea* / Kids' APT7, 2012

文化・異文化教育の側面を含みつつ、テキストとビジュアルとのマッチングをさせています。

これはパラストウ・フルハル(1962年イラン生まれ)によるマルチメディアのプロジェクトです^[FIG. 13]。イランのペルシャ語の文字は、それぞれが一つの言葉を具体化しているという点を使って、子どもたちがスクリーン上でペルシャ語の文字を変形させて絵を描き、最終的にその字が意味する動物のシルエットが浮かび上がるようになっていきます。出来上がったものは自分や友達にメールで送ることができます。

最後は岩崎貴宏(1975年日本生まれ)です。ご存じかと思いますが、彼は髪の毛や綿糸、埃といった非常に儂いマテリアルを使って、都会の情景やランドマークなどの非常に精巧なミニチュアを作っています。そしてこれが見る者の視覚を試すようなものなのです。これを美術館の中の目立たない場所に置き、子どもたちが望遠鏡を通して見るように設置しました^[FIG. 14]。ここでどうやって見るのかということと同じくらい大事なのが、何を見るのかということです。日常の中で目に留めていないような物がクリエイティブなプロセスを通して変化していくという点を見せています。

最後になりますが、美術館からアーティストにこれをしてほしいと依頼はしていないということがご理解いただけたかと思います。アーティストがこういうことをしたいと私たちに伝え、これを今度は子どもたちにぶつけてみます。これでうまくいくかどうか、子どもたちの反応を見た上で、さまざまな部署と協力して実現に向けて動きます。

全てのアーティストがこういう子ども対象のプロジェクトをやりたいわけではなく、それはそれで問題ありません。でも子どもたちと一緒にやりたいというアーティストもたくさんいます。そういうアーティストは本当にありがたいです。

ありがとうございました。

帆足 | ライトさん、どうもありがとうございました。駆け足ですが、APTという3年に1回ブリスベンで行われている美術館を拠点とした国際展の教育プログラムの概要をご紹介いただきました。



FIG. 13 Parastou Forouhar, *Persian for kids* / Kids' APT7, 2012



FIG. 14 Takahiro Iwasaki, *Out of disorder (under construction)* / Kids' APT7, 2012

第2部：横浜の取り組み紹介

「横浜トリエンナーレと横浜美術館による教育プログラムへの取り組み」

帆足 | 次に、横浜の取り組みを簡単にご紹介したいと思います。本日この会を設けましたのも、どのような教育プログラムのモデルが良いかという議論ではなく、どのような可能性を我々が探るべきかという意識のもと、子どものプログラムなのか、教育プログラムなのか、それを今後どのように構築していくかということを考えたいと思いました。

横浜トリエンナーレは、2001年に始めて2005年、2008年、2011年とこれまで4回開催しています。前回(2011年)は「Our Magic Hour」というタイトルのもとに、先ほどご紹介いただきました若崎貴宏さんなどの作品が展示されたのが記憶に新しいと思います。第1回は35万人、第2回は19万人、第3回は55万人、第4回は33万人という規模を誇る国際展となっております。

前回から、「見る・育つ・つなぐ」という指針を掲げるようになりました。特にこの「育つ」という部分をどのように私どもが考えていくのかというのが、本日「次世代」という言葉を使ってイベントを企画した理由でもあります。

前は、「キッズ・アートガイド2011」という、子どもによるガイド・ツアーを初めて美術館の中でも試みました。これを検証しつつ、今後これを展開していくのか、ほかのプログラムを計画していくのかということを現在検討しているところです。特に検討したいのは、今後横浜美術館を拠点として行う場合には、横浜美術館は実はもう24年「子どものアトリエ」「市民のアトリエ」という活動をしているので、その資源を活用して、連携していく可能性も探らなければなりません。そこで、美術館をベースにしたAPTの事例というのは私たちに示唆深いものとして今回は色々ご相談、協議、また質問をしながら後半を進めて参りたいと思います。まず、教育普及を担当している関より、横浜美術館の事業をご紹介します。

関 淳一(以下、関) | 横浜美術館、教育普及を担当しております。よろしくお願いたします。

本日は、クイーンズランド州立美術館を拠点に開催されているAPTから、サイモン・ライトさんに越えさせていただいております。私どもの横浜トリエンナーレも前回から横浜美術館を拠点に開催するようになりましたので、現在横浜美術館で行っている教育プログラムについて共有させていただき、今後私どものトリエンナーレで美術館のエデュケーションがどのように活かされていくかということと一緒に考えていただければと思っております。

横浜美術館は今年で開館24年目になりますが、つくるプロセス、作家との出会い、造形体験、創作体験に重点をおいた教育普及を、12才以上を対象にした「市民のアトリエ」、12才以下を対象とした「子どものアトリエ」でずっと行ってまいりました。

「子どものアトリエ」では、子どもの内面的な育成を、造形活動を通して支援していくということを主眼に置くと共に、将来の来館者をどんどん増やしていきたい、色々な方に美術館に親しんでいただきたい、ということを目的に活動を進めております。

また、「子どものアトリエ」では、学校向け、個人向けの色々なプログラムを行っておりますが、今年度から横浜美術館では鑑賞を担当するチームもでき、今までの造形体験に鑑賞もリンクさせたプログラムを色々充実させております。この写真は浮世絵を中心に展示をいたしました前回の企画展「はじまりは国芳」展の時に浮世絵の摺り師のデモンストレーションを子どもに見てもらった企画です^[19]。また、子どもに浮世絵の摺りの体験してもらい、エドゥケーターと一緒に鑑賞するという講座も行いました。踏み台等を用意して子どもが見やすい環境を作って鑑賞しているところです。

夏休みには「子どもフェスタ」を開催しています。美術館を見てきてレポートしなさいという宿題を抱えて来館する子どもたちをサポートする意味も含めて、美術館のエドゥケーター、市民ボランティア、それから学校の美術教師のボランティアが、美術館の作品へ子どもたちを導いていくというかたちで開催しております。実際の画材のサンプルや作品カード等をきっかけにして、子どもたちとやり取りをしながら、実際の作品をよく見るということをしします。その作品について子どもたちが自分の意見を持ち、そして作品を考えていくことを促していく、というかたちで進めております。また、この期間中には学校の美術クラブや個人を対象にしたギャラリーツアーも行っております。横浜美術館ではこういうかたちで学校の先生に参加していただいたり、学校の美術部に来ていただいたり、学校における美術教育との連携ということも視野に入れて、今後美術館教育を発展させていきたいというふうに考えております。

短いですが、これで横浜美術館のエデュケーション、特に子どもを対象としたエデュケーションについての報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。



FIG. 15 親子で鑑賞「浮世絵摺り師の技を見よう」
刷り師：林 勇介

第3部：意見交換

帆足 | 質問をたくさん寄せていただきありがとうございます。今日は教育普及関係や学校関係の方々も大勢来ていらっしゃると思います。内容の重複している質問につきましては、まとめてご質問させていただきます。

まず、QAGOMAの美術館のプログラムと学校教育との関係性、学校と先生との関係性、また学校単位の来館の場合、美術に関心のない生徒さんへの取り組み方、その辺りはどのように対応されていますでしょうか。

サイモン・ライト | 学校との取り組みについてはいくつかのやり方で実現させていますが、ブリスベンにはQueensland Art Teachers Association (クイーンズランド州の美術教師のための協会)があり、そちらとの関係も緊密なものになっています。

チルドレンズ・アート・センターは私たちの教育部門と組織としては別のものであるということをつけ加えておきます。プロジェクトの実施が決まった瞬間から実行委員会形式で発足させ、委員会自体はチルドレンズ・アート・センターの傘下になります。教育普及担当と、マーケティング担当、デザイナー、キュレーター、そしてアーティストといった関係者全員がここに集まり、同じ目標に向かって協働していきます。

教育部門から2名の職員は常勤で、2人とも初等教育と中等教育における教員経験があります。チルドレンズ・アート・センターの2名の職員もやはり教育関係の経験があります。そういったところからお互いに刺激し合っていくことができます。

私たちは、それぞれのプロジェクトが美術館のスペースを使って自然に展開していけるように努力しています。ここにあるのは次回の展覧会の見取り図案ですが、この空間に入ると、興味を持っていない子どもがしばらくすると自分で発見することを学んでいけるようにしています。物を作るのが好きな子どものためには専用のテーブルを用意してありますし、パフォーマンスをしてそれをビデオに撮って自分で楽しむのが好きだという子どものためにはそういった舞台も用意してあります。下にあるのはアーケードゲームのコーナーですが、これは子どもたちが体験できるインタラクティブな教育的装置です。

企画の数は増えており、例えばAPT7では13あるプロジェクトのうち九つがチルドレンズ・アート・センター、それ以外はレストランやギャラリー空間全域で展開しています。一つも楽しめないという子どもが出てくることはないでしょう。

プログラムと協賛の関係性

計画途中のプランを少しお見せしましょう。これは次のチルドレンズ・アート・センターの企画で、これを実現するためにはおそらく15万豪ドル(約1,470万円/1豪ドル=98円*)ほど必要になるため、私たちは地元に着目し、スポンサーを獲得することを重視しています。通常スタッフとプロジェクトに関わる出版物関係、そして学校などに送る教育目的のキットなどの費用は美術館で持つことが多いですが、全体的に実現していくためには資金が必要です。例えばオーストラリアの大手鉱山会社であるサントスや、ティム・フェアファックス・ファミリー財団といった有力な慈善団体にご協力をいただいています。

スポンサーとの関係は非常に重要なものです。例えばサントスはクイーンズランドの中心から離れた場所が拠点です。私どもは(クイーンズランドの州都である)ブリスベン市ではなく、クイーンズランド州のアートギャラリーなので、州内の遠隔地でも自分たちの活動を提供しています。一方、ティム・フェアファックス・ファミリー財団も、州全域で農業関係の事業活動を一族で行っており、個人としても地域への貢献に注力しています。地域でのプロジェクトや情報を都心に発信することにサポートして下さるだけでなく、地域への発信にも協力してくださっています。ご参考までに、APT7にティム・フェアファックス・ファミリー財団が実際に提供してくれた総寄付金は、30万豪ドル(約2,940万円/1豪ドル=98円*)になります。

帆足 | 補完しますと、クイーンズランド「州立」(でブリスベン市立ではない)ということは、いわゆる神奈川「県立」であって横浜「市立」ではないというようなことなのですが、州内でアウトリーチ・プログラムも展開されているということでした。

サイモン・ライト | はい。チルドレンズ・アート・センターは一般向けに開放しています。幼い子どもに向けた活動の一環として、週7日間開いています。子どもたちは、大人と一緒に来る子どもたち、学校の団体と、大きく二通りに分けて考えています。

学校の先生に対する調査をかなり行います。実際に学校の教室に行き、教師や生徒たちと密に接し、直接反応を探ります。私たちは、教育部門を通して自分たちの活動がクイーンズランド州のカリキュラムに合致しているということも必ず確認しつつ進めています。

* 参照：三菱UFJリサーチ&コンサルティング WEBサイト・三菱東京UFJ銀行対顧客外国為替相場(2013年3月TTM月中平均相場)

加えて、チルドレンズ・アート・センターは子どもたちの担当をする係員として、教員免状の勉強もしている若手のアーティストを雇っています。ボランティアではありません。それは、私たちが大学教育の最新動向を逐一知ることができることに繋がるからです。また、若手のアーティストにとっても、子どもたちがさまざまな状況にどう対応し、アートとどう対話するかということを見ることができる良い機会となるのです。

帆足 | 今のお話ではかの質問にも枝分かれできそうなので、ついでに聞いてしまいたいのですが、アートセンターとエデュケーション部門がある中で、アーティストは有償で組織の中に入るという話がありました。では、そのエデュケーター自身の研修、その人たちはどうしているのかということと、他に市民ボランティア的な人たちはどのように関わっているかということで、その常勤職員以外の方たちの関わり方と、一方で有償のエデュケーターたちのスキルアップまたは研修はどのようにされているのかを伺ってもよろしいでしょうか。

サイモン・ライト | QAGOMAには、チルドレンズ・アート・センターとは別のボランティア・プログラムがあります。

私たちは、チルドレンズ・アート・センターでは若いアーティストを雇わなければいけないという思いがあります。これには特殊な環境下で人材を育てる目的もあります。ボランティアに頼るには責任が大きすぎるのです。子どもたちはハサミや彫刻刀といった道具を使うなど、場合によっては危険を伴う状況で物を作っています。このため、まずキュレーターとエデュケーターが相談をした上で、常時登録されている25名のアーティストに対して、プロジェクトの中でどういうことが求められているのかのブリーフィングを行うようにしています。

教育の現場との連携

しかし、スタッフはセンターの中だけにいるわけではありません。地域各所で活動するために、教育スタッフはインフォメーションシートなど展示内容に沿った資料や、ツアー用のキットを作成しています。今回のAPT7の場合は79か所にキッズAPTを巡回し、提供しています。

クイーンズランド州の地図を見ると、北にトレス海峡があり、非常に複雑な地形となっています。クイーンズランド州にはアボリジニがいるだけでなく、北側に位置するトレス海峡諸島に住んでいるコミュニティも同時に存在しており、オーストラリアの中でも複雑な立場にある州です。どういう違いがあるかという、トレス海峡の島人たちはどちらかといえばメラネシアやインドネシアの方との親和性が高いという自己アイデンティティを持っています。一方、本土のアボリジニは、口伝や個々の歴史を大切にしています。私たちは、こういった文化的な差異をきちんと認識しつつ、コミュニケーションの手法を考えなければなりません。

こういった理由から、私たちの職場では、アボリジニ・アートのキュレーターとアジア太平洋地域専門のアートのキュレーターがいます。また、チルドレンズ・アート・センターの担当者、教育部門、そして私とが共に会議を行い、一つのプロジェクトに取り組んでいます。

スタッフは全員研修を受け、ボランティアも受けます。研修では、特に各プロジェクトの具体的な情報についてきちんと伝えるようにしています。ボランティアの場合は、さらに応急処置を含めた、緊急時の対応についても研修を受けてもらっています。チルドレンズ・アート・センターで働くスタッフに関しては、やや難しく、子どもたちと一緒に何かの活動をして問題を起こさないという確認が警察からも入るため、専用の研修が求められます。研修は、継続的かつ定期的実施しています。加えて、教育担当の2名の職員と、チルドレンズ・アート・センターの2名の職員は定期的に、美術教師の集まりや、そのほかの専門家の団体等とのミーティングを開き、カリキュラムの最新状況について情報を刷新するようにしています。

美術館では、スタッフの個々人の専門性を高めるためには、ボランティアであれ、チルドレンズ・アート・センターで臨時で雇っている若手のアーティストであれ、重点的に投資します。

ゴードン・フーキー(1961年オーストラリア生まれ)は、オーストラリアのアボリジニのアーティストなのですが、非常に政治性が強いと言われています。彼の作品は、植民地化や、アボリジニの人々が自分たちの本来持っていた土地から移り住むことを余儀なくされたこと等について語りかけています[FIG. 16]。

アボリジニの歴史は、クイーンズランド州の教育カリキュラムのなかにも組み込まれており、学校側もこの件に関して新しい教え方を模索しています。アボリジニの文化は視覚的にも口述的にも伝えられています。

教える上では、アボリジニといっても単一の民族ではないという点を強調しようとしています。オーストラリアには700の言語があり、それぞれが個別の文化を持っています。ゴードン・フーキーのトーテムとはカンガルーなので、今回のアート・センターでのプロジェクトでは4種類のカンガルーを取り上げようかと考えています。*

* フーキーによる児童書『The Sacred Hill』を元にしたKangaroo Crewというインタラクティブなプロジェクトを実施。



FIG. 16 Gordon Hookey, *Blood on the wattle, blood on the palm*, 2009

どうやって人が入植していったのかということ、このカンガルーのメタファーを使って伝えます。最初にアボリジニが来て定住し、あとから白人が来たのですが、ここでは騒がしい九官鳥が飛んできて、聖なる丘の上で暮らしていた4種類のカンガルーたちを追い払います[FIG. 17]。

1番左にいる小さいカンガルーが「ツリーザ」です。木のカンガルーで、木の枝葉部分で暮らしています。2匹目は「ロッコ」という名のロックワラビーです。このため作業用機の椅子は全て岩(ロック)になっています。「ポツィー」と「ブルーイー」という岩場や平地に住む別のカンガルーもチルドレンズ・アート・センターで紹介していきます。

クイーンズランド州の教育方針に沿って、この話は4種類のカンガルーたちが力を合わせ、一度手放した聖なる丘を取り戻し、最終的に九官鳥と共に暮らしたという和解の物語になっています。子どもたちは、それぞれの動物たちの特徴を読み解き、説明していくことも求められます。力持ちである、頭がいい、目がよく見える、跳ぶことができる、といった点です。これらの特徴を自分たちでも実際のプロジェクトの中で体験できるようになっています。

このプロジェクトは二つのアボリジニの学校で綿密な調査をして、アボリジニの生徒さんと先生方のフィードバックをいただいた上で、文化的にみて問題がないことを確認しています。

帆足 | ありがとうございます。

ところで、7日間無料でキッズ・アート・センターが開いているというお話がありましたけれども、QAGOMAは入場無料ですよ。

次に非常に多くの質問をいただいたのが、やはり評価のことでした。特に子どものプログラムの評価について今のような実施されているのか、またどのように課題を抱えているのかということ伺いたいと思います。



FIG. 17 Gordon Hookey コンセプト・スケッチ

事業の評価測定とその還元

サイモン・ライト | 当館では独自の評価が必要だと考えています。数字で出せる部分は内部で行っていますが、体験のクオリティという難しい部分の評価についてはモリス・ハーグリーブス・マッキンタイア(<http://www.lateralthinkers.com/>)というロンドンにある会社に委託しています。この会社とは数年間かけて、子どもと親と教師向けに非常に細かな項目を入れたアンケートを設計しました。そして全てのプロジェクトできちんとした代表サンプルが採れるようにしています。

毎日50件から100件の評価を実施しています。これにより大きなフィードバックを得て、還元することができます。必要とあらば展覧会の会期中であってもコミュニケーション戦略を微調整して、それに応えていくことができるわけです。

帆足 | 定性的な評価については、イギリスの会社に委託しているということですが、この会社を選んだ理由、もしくはその会社の評判、評価というのはどのようなものなのでしょう。

サイモン・ライト | その会社を宣伝するつもりではないですが、モリス・ハーグリーブス・マッキンタイアは業界全体の中でも評判が非常に高いところ。偏見のない質問項目を作る方法論的な枠組みを持っているということで評価しています。評価項目を使い回さず、きちんと個別の美術館に合わせてテーラーメイドで作るといふ点です。もう一つこの会社の良いところは、単に私たちの美術館の活動だけに焦点を当てるのではなく、美術館の運営にかかわる条件や事情も考慮してくれるのです。クイーンズランド州政府の掲げる文化観光や、教育目標、地域コミュニティの発展、観客層の育成等の目的に対しても理解した上で、それらに対応した評価を行ってくれます。

自分たちの自己評価も常に行っていますが、スポンサーがどういふことを求めているのかということに常に念頭に置いています。石油・天然ガス会社のサントスの場合は、提供した資金の用途は問いませんが、彼らは州の各地で事業を展開しているので、私たちもそのエリアで実績を見せる必要があります。サポートしてくれている団体の方々にも関わっていただきたいので、彼らの子どもにも特別プログラムを提供しています。同時にフィードバックをもらえるようにしています。それ以外にも、展示や企画について実際の観客の期待と差がないかなど、学校と連携して意見を拾っています。

最後に、プロジェクトによっては「ツーリズム・アンド・イベント・クイーンズランド」や「ブリスベン・マーケティング」といった特定の団体がスポンサーになる場合もあるのですが、こういった団体からは詳細な情報を要求されます。このため、彼らの期待値に合わせるべく常に詳細な評価を実施することになります。例えば観客動員数が未達であったということから、スポンサーシップとして提供されるといっていたお金が満額ではなくなることもあり得ます。こういった団体は、美術館に人が来た場合、ブリスベンのどこのホテルで何泊するのか、どれくらいのお金を落とすのかとい

うことを知りたがりです。

帆足 | ということは、一般の企業のほかに地元の観光局系がスポンサーになっているということも評価の対象の幅を広げているという話ですね。

最後の質問となりますが、評価のほかに展覧会こそがその来場者増を「ドライブ(推進)」していく、そして、その展覧会を作るのはアーティストであるという話をされていたかと思います。

QAGOMAでは、アーティストは展示する人、アートセンターで雇われている人など、さまざまなかたちで関わっているようですね。キッズAPTのなかでの作品を展示または委嘱する場合、どのような基準で作家を選んでいるのですか？ またどのような方法で依頼していますか？ 最後に、アーティストとの付き合い方について、教育プログラムとして特徴があれば教えてください。

サイモン・ライト | コラボレーションという言葉が一番しっくりくるでしょう。その過程のなかで、美術館もアーティストもひとりでやっていると感じることはないと思います。とても密に連携し、コミュニケーションを図っています。チルドレンズ・アート・センター独自のプロジェクトだけを行っているわけではなく、QAGOMAの二つの美術館でもプロジェクトを進めています。クイーンズランド州立美術館とGOMAでプロジェクトをやっても、チルドレンズ・アート・センターではそのアーティストの企画をやらないということもあります。色々な方面からチルドレンズ・アート・センターへの活動の幅は広げられるように模索はしています。しかし、アーティストの考え方を変えることはしたくないので、なにかをやしてほしいと指図することはありません。もしもアーティストがしっくりこないといった状況があるとすれば、アーティストは他にも機会はたくさんあるので正直にその旨を伝えてくれるでしょう。

一つ分かってきたことは、子どもたちというのは幼くても非常に複雑な考えをきちんと受け止めることができるということです。アーティストにも質を下げてほしくありません。子どもたちに紹介する方法を工夫することで作品にあるさまざまな断面を子どもたちが自分で理解し、身に付けていくことができるようにすればよいのです。

従来から存在していたものをただ自然に発展させていった、そういったものこそが一番良いプロジェクトに繋がってくるのが分かってきました。

帆足 | どうもありがとうございます。実はほかに細かく色々なご質問をいただいているので、今日は全部質問できないのが大変残念なのですけれども、本日はここで終了したいと思います。

APT7は2013年4月14日までオーストラリアのブリスベンで行われています。皆さんこれを機会にぜひ行ってみてください。クイーンズランド州は、ゴールドコーストで有名ですが、実はこのようにブリスベンに美術館があって、アジアと大洋州の美術を中心とした作品を収蔵し、3年に一度特徴のある国際展を開催しています。

最後にサイモンさんに拍手をお送りください。

サイモン・ライト

クイーンズランド州立美術館／ギャラリー・オブ・モダン・アート
プログラム担当アシスタント・ディレクター

1993年よりキュレーターおよびマネージメント職として商業画廊、私立美術館および公立美術館の仕事に携わる。グリフィス・アートワークス+グリフィス大学アートギャラリーのディレクター、プライベートコレクションのコンサルタントを経て、2007年よりクイーンズランド・アート・ギャラリー財団に所属、2012年11月より現職。これまでに200以上の展覧会や出版プロジェクトを担当。

クイーンズランド州美術館・博物館アチーブメント賞(2004年-2005年)、オーストラリアビジネス芸術文化振興財団のクイーンズランド州ナショナル・オーストラリア銀行提携賞(2006年)を受賞。第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2009年)オーストラリア館コミッショナー評議委員、第54回(2011年)同ビエンナーレのオーストラリアチャンピオンプログラムメンバー、クイーンズランド州国際彫刻委員会のプレミア選考委員会委員(2012年)、QCA 産業諮問委員会委員(2012年)など歴任。

©写真クレジット

FIGS. 1-14 (6-10頁)、FIGS. 16-17 (13-14頁) : Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art [QAGOMA] 提供
FIG. 15 (11頁) : 横浜美術館 提供

来場者アンケート

[来場者数] 67

[アンケート回答数] 54

[男女比] 男：6 | 女：44 | 未回答：4

[年齢] 19歳以下：1 | 20代：11 | 30代：15 | 40代：12 | 50代：10 | 60代：2 | 未回答：3

[住まい] 横浜市内：20 | 横浜市外(県内)：9 | 東京都：18 | 国内：3

本プログラムの内容について

- ・ 現代アートと子どもをどのようにつなげればよいのか、きっかけ作りに役に立った。
- ・ APTの存在を初めて知った。子どもたちから広がるアートという視点になるほどと思った。小学校教員として今後の教育活動に生かし、もっともっとアートと子どもをつなげていきたいと思った。
- ・ 学校と美術館、アーティストと美術館の関わりやその重要性、実際の具体的な活動などを知ることができ、大変勉強になった。子どものためのプログラムは、子どものためのものだけではないと実感した。
- ・ APTがオーストリアの歴史・民族(アボリジニなど)とアートが“結び”ついていた点が興味深かった。
- ・ 組織体制についてスキのない取り組みで着実に来場者数を伸ばしていることに感心した。ボランティアに対しての考え方も日本とは違う正論があると思った。
- ・ 本日のように取り組みについての思考検討プロセスを公開のかたちで提示されるのはとても良い。
- ・ 海外の成功例のそこに至るまでのプロセスが解ったことは良かったし、日本においてもイベントが広く知られ、アートの裾野が広まればよいと思う。

横浜トリエンナーレ全般に対する期待

- ・ 子ども参加のブースを設けてほしい。
- ・ 本日のシンポジウムのテーマでもある、子どもと現代アートをつなぐプログラムが盛んになってくることを期待している。
- ・ ガイドブックの小中学生版が欲しい。ちょっとしたお話仕立てのような難解な語句のないものがあると良い。ヨコハマトリエンナーレ2014では、ちょっと遠い新港ピア会場にぜひ行ってみたいと思える(作品以外の)仕掛けがほしい。
- ・ 今日のはなしを活かしてほしい。トリエンナーレは毎回子どもを連れている。このよさを活かせる環境を作ってほしい。
- ・ 参加でき、手で、体で味わえる。
- ・ アーティストとともに手を動かすワークショップ。
- ・ 多世代で楽しめる内容にしてほしい。見るだけでなく、ワークショップなど、体験型の作品も多いとアートとつながった印象を持てると思う。
- ・ もっと地元をまきこんでほしい。
- ・ 世界に誇れるものになってほしい。
- ・ 準備段階の事象を公開すれば、新たなアートイベントや類似のイベントの促進につながると思う。この取り組みを「横浜」のみに留めないで先駆者となってほしい。
- ・ 初めて美術館を訪れた人にとっても、何度も訪れている人にとっても、開かれた場(参加しやすい場)であってほしい。
- ・ 物事の問題を感じて、考えることの大切さを伝えることは大変難しい問題だと思うが、その入り口であってほしい。ヨコハマトリエンナーレ2014では、森村さんの考えられている「エンターテインメント」に期待します。日本に現代美術を浸透させてほしい。

**A Case Study on Educational Programs of Asia Pacific Triennial of Contemporary Art in Australia
Kids' APT: Connecting Contemporary Art and Kids**

The Asia Pacific Triennial of Contemporary Art (APT) is a contemporary art exhibition that takes place every three years at the Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art (QAGOMA). It was inaugurated in 1993 to exhibit and collect contemporary artworks of Asia and the Pacific region; Kids' APT is a program that started in 1999 with a focus on young audience.

Simon Wright of QAGOMA was invited on March 8, 2013 to introduce the program at the pre-event of Yokohama Triennale 2014, "Kids' APT: A Case Study on Educational Programs of Asia Pacific Triennial of Contemporary Art in Australia." The programs for young audience at the Yokohama Museum of Art and Yokohama Triennale 2011 were briefly introduced together with the case study of APT. The questions from the school teachers and education officers in the audience led to highlighting and sharing specific efforts and issues. This document is a record of the proceedings.

[Date/Time]

March 8, 2013 / 19:00-21:00

Children's workshop, Yokohama Museum of Art

Organizers: Organizing Committee for Yokohama Triennale, Yokohama Museum of Art

[Timetable]

- | | |
|-------|---|
| 19:00 | Opening Remarks by the Organizer
Osaka Eriko (Director, Yokohama Museum of Art / Chairperson, Organizing Committee for Yokohama Triennale) |
| 19:05 | Part 1 Presentation "Kids' APT: A Case Study on Educational Programs of Asia Pacific Triennial of Contemporary Art in Australia"
Simon Wright (Assistant Director of Programming, Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art [QAGOMA]) |
| 19:40 | Part 2 Introducing Education Programs in Yokohama "Yokohama Triennale and Yokohama Museum of Art"
Sekii Junichi (Educational Department Manager, Yokohama Museum of Art) |
| 20:00 | Part 3 Discussion
Moderator: Hoashi Aki (Managing Director, Organizing Committee for Yokohama Triennale) |
| 20:45 | Closing |

1) Affiliation and positions of the speakers are current as of September 14, 2014.

2) Japanese, Chinese, and Korean names are spelled in the order of family name, given name with some exceptions.



Simon Wright
Assistant Director of Programming, Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art (QAGOMA)



Osaka Eriko
Director, Yokohama Museum of Art
Chairperson, Organizing Committee for Yokohama Triennale



Seki Junichi
Educational Department Manager, Yokohama Museum of Art



Moderator: **Hoashi Aki**
Managing Director, Organizing Committee for
Yokohama Triennale

Part 1

Presentation

“Kids’ APT: A Case Study on Educational Programs of Asia Pacific Triennial of Contemporary Art in Australia”

Osaka Eriko [Osaka] | Hello and welcome. Thank you all for coming on a Friday night.

Today, we have invited Simon Wright from Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art (QAGOMA) to speak about the special program called Kids’ APT, a program inaugurated in 1999 to coincide with the Asia Pacific Triennial of Contemporary Art (APT). When we talk about international exhibitions, we usually discuss the artists and trends in contemporary art. But today, we will hear how the art on exhibit is communicated to the children.

When I visited APT in 1999, I remember seeing a group of children enjoying themselves in the corner of the gallery. I remember thinking about the potential of a program like this taking place during an international exhibition, but I also then thought how we would not be able to do the same in Japan.

I am sure there are advantages as well as disadvantages in running a program for children in a museum. I hope that Wright-san can share with us his various experiences in his talk. Today’s program will be 2 hours long, but I hope you will enjoy it until the very end.

Hoashi Aki [Hoashi] | So, I would like to now invite Simon Wright to give his presentation.

Wright-san is currently Assistant Director of Programming, QAGOMA. He has worked for university galleries as well as private collections in the past. Therefore, I hope to hear about the education program during APT, but also maybe other things that may be related to his experiences in the different fields. His presentation will be on Kids’ APT, a program for children that is organized during the APT.

Simon Wright [Wright] | Thank you. It’s a very great pleasure for me to be here.

It seems a very natural experience these days to walk into a museum and encounter generations of visitors participating and experiencing art in their own way – perhaps they make something, perhaps they watch something like a performance or talk, perhaps they’re thinking about an artwork, perhaps they’re viewing online interviews, interactive labels or uploading images of their visit on social media. This opening up of the museum space has created a very different visiting experience. We privilege interpretive potential over the authorial voice. We are taking the museum experience from a more passive to a more active experience.

At QAGOMA, contemporary art has become a major focus for children and for collection building and our approaches to programming, and it has contributed to some of the gallery’s highest atten-

dances. Exhibitions drive attendance.

The image that you are looking at is the front of GOMA, the Gallery of Modern Art [FIG. 1]. The Queensland Art Gallery is about 100 meters away.

The impact of recurring exhibitions, such as the Asia Pacific Triennial of Contemporary Art, or APT, which is the gallery’s flagship contemporary international art exhibition, is testament to how we service different audiences. Without question, some of the most inspiring contemporary artworks presented in exhibitions like the APT have really challenged visitors’ expectations and provided new experiences, we want to enable direct contact and participation with artworks.

Children as New Audience of Contemporary Art

We see children as amongst our most significant audiences for contemporary art, and we tailor specific programming for their attention.

As a consequence of this, we have become central to many debates surrounding the contested space of art and children and its relationship to core museum practices. And it reveals a lot of about our assumptions about art, who values it and for whom it is made.

When the Queensland Art Gallery decided to focus especially on children and families in its programming in the late 1990s, there were very few national or international models to draw on. Since 1998 over two million children have visited the gallery.

Museum education in the late 1990s was seen as playing an



FIG. 1 Visitors to 21st Century: Art in the First Decade, GOMA, 2010-11

important, but only a secondary to developing collections and curating exhibitions. Now, after 15 years of programming for young audiences, the gallery is recognised as an international leader.

In particular, for the development of children's programming at the Queensland Art Gallery, the culture of our museum had to change first. This was an immense collective effort and challenge for generations of directors, executive managers, educators, curators and designers. The organizational culture of the gallery has evolved so that, now, children and families as an audience is not considered a separate group, but a part of our strategic plan [FIG. 2].

Children's Art Centre and Its Vision

Since the Gallery of Modern Art opened in 2006, the Children's Art Centre has occupied two physical spaces, but its presentation extends into all gallery exhibition spaces [FIG. 3]. So projects integrate children's programming in ways that very purposely blur the boundaries between artworks for adults and artworks for children.

In the process of working with artists and audiences, the Children's Art Centre has come to define several principles, and there are three main ones:

1. Active participation enables children to engage their intellect in direct experience with a diverse range of contemporary ideas and cultures.
2. Contemporary artists' ideas are an authentic and appealing means through which children can learn about art and its importance in the lives of people around the world.
3. In the 21st century, the profession of art continues to expand and diversify, providing children with a broader understanding of the field and their role in it in the future.

So while design innovation and staff expertise has changed and evolved greatly over time, many principles of the current Children's Art Centre programming have remain unchanged. We aspire to deliver and support direct engagement with artworks. So the focus there is on making, doing and interpreting. Secondly, we want to foster enjoyment while learning. So the focus there is on visual literacy, comprehension and problem solving. The third aim is to allow children to maximize their own experience with a range of

contemporary ideas and different cultures. We always try for a balance between direction, instruction and free association.

Very simple and very practical measures like providing more insight for audiences into an artist's process of making art, and demystifying the practice of being an artist, and getting closer, more personal connections through hands-on interaction are all central to our aims.

The approach that we have taken has exceeded expectations, so much so that in the evolution of the Children's Art Centre, the model for audience engagement has not only changed children's expectations, but every visitor's expectations. In exhibition spaces around all of the galleries we have special cards for children. We often receive feedback from adults that says that information enriches their experience as well as kids.

Children as Ambassadors for the Museum

Children are some of our most regular visitors now and they are our best ambassadors. They bring their families to the gallery, rather than parents bringing their kids.

We trial all of our projects with school teachers in the community first, so that we know they are going to work. Last year, 20 percent of our visitors to the whole complex were children. When you compare this internationally, that is an extraordinary response, much higher than the normal range of art museums; for instance, in the United Kingdom, it is around 9 percent.

In developing projects for children, we conduct research trials in schools and communities which enable our gallery staff to test concepts and materials, and we observe and gauge the children's response to the different projects.

While we are collaborating with artists, we are also collaborating with children. The child's feedback is part of a crucial feedback loop.

In this way, the Children's Art Centre projects are subject to the same rigorous scrutiny as any contemporary exhibition or commissioning process we undertake. It's an insurance policy we take out, so that we know our exhibition product will work. Kids are very honest. They tell you straight up if it's not going to work. When they like something, they don't just like it, they love it.



FIG. 2 Visitors to *The 7th Asia Pacific Triennial of Contemporary Art*, QAGOMA, 2012-13



FIG. 3 Children's Art Centre, Level 1, Gallery of Modern Art

Kids' APT

Let's talk about APT3, which was the first APT where we took APT Kids to the public.

Consider here the numbers of visitors that attend and see the number grow overall as well as the number of children [FIG. 4].

Kids' APT in 1999 represented a number of groundbreaking firsts in terms of our children's programming. Firstly, it acknowledged children as a key audience for an international contemporary art event. It was also the beginning of a shift in the gallery that saw a need for children's programs to be an integral part of major exhibitions, not just a quick add-on. And it was the first time the gallery commissioned contemporary artists to develop artworks specifically for children, and we now acquire those works as well.

Since 1999, Kids' APT has contributed almost one quarter of the gallery's total children's attendance. Many of our adult visitors today, as well as some of our young gallery staff members, made their very first encounter with the gallery through Kids' APT, whether they visited with their family or with schools. A very significant part of our audience started with us as children and they now see the gallery as their place, a place that they can show off to others.

One of the highlights of APT3, for example, was the work of New York based Chinese artist Cai Guo-Qiang (b. China, 1957). Cai

Guo-Qiang's 30-meter long bamboo suspension bridge called *Blue dragon & bridge crossing* spectacularly spanned the gallery's Water-mall. In collaboration with Cai Guo-Qiang, we encouraged young visitors to make their own structures. Thousands of kids, in fact, visitors of all ages took up that challenge and they made quite beautiful things out of bamboo and masking tape [FIGS. 5, 6]. Very simple. Some people said, "Wow, that bridge must be dangerous for kids." In case you are worried, no children fell off this bridge; only an adult.

Three years later, the numbers were growing in both audience and children for APT4.

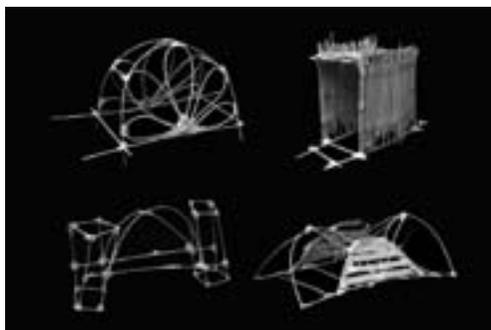
With Kusama Yayoi's (b. Japan, 1929) work, *The obliteration room*, a project that really builds nothing from something and something from nothing, we used over 250,000 dots [FIG. 7]. We were able to talk about screen technology and pixilation. This was ultimately shown in the Tate Museum's survey of Kusama last year.* Some of the kids covered themselves in dots which was actually a great extension of Kusama's focus on the body.

We had an extraordinary number of visitors for APT5, but the number is a little bit artificial because it coincided with the opening of GOMA as the second site. We involved children in the "Bamiyan drawing project." Afghan children sent drawings through Khadim Ali (b. Pakistan, 1978) so that kids in Brisbane could see what it's like to be a child in Afghanistan [FIG. 8].

* The retrospective exhibition "Yayoi Kusama" held at Tate Modern from February 9 to June 5 in 2012.

FIG. 4 Changes in visitor numbers of APT3-7

	Dates	Duration	Number of visitors	Number of visitors (children)	Number of venues
APT3	September 9, 1999 – January 26, 2000	5 months	More than 150,000	More than 16,700	1
APT4	September 9, 2002 – January 26, 2003	5 months	More than 220,000	More than 44,400	1
APT5	December 2, 2006 – May 27, 2007	6 months	More than 750,000	192,445	2
APT6	December 5, 2009 – April 5, 2010	5 months	More than 530,000	More than 130,000	2
APT7	December 8, 2012 – April 14, 2013	4 months	More than 350,000	More than 83,500	2



FIGS. 5, 6 Cai Guo-Qiang, *Blue dragon bridge crossing* / Kids' APT3, 1999

You can see from the moment an idea starts, we involve the designer and the architect as well as curator and artist.

This is Shirana Shahbazi's (b. Iran, 1974) project at Kids' APT6. We asked children to use local fruit and vegetables to make a still life that were sent to the artist, which then was turned into the artwork for the Children's Art Centre [FIG. 9]. We did still life drawing workshops.

This is Isabel & Alfredo Aquilizan's (b. the Philippines, 1965/1962) project, with an emphasis on recycling materials found at home [FIG. 10]. Children were asked to bring in normal everyday things that had no more use to repurpose.

APT7 continues as we speak, with over 350,000 people through the doors so far and we had almost 85,000 children. (as of March 8, 2013)

This is contemporary Aboriginal artist Daniel Boyd (b. Australia, 1982) [FIG. 11]. Aboriginal art in Australia is often thought of as only being about dots, but there is so much more information underneath those dots. So Daniel Boyd's interactive screen project allows children to move their fingers over the screen to reveal their own image under the dots.

With the artwork by Tiffany Chung (b. Vietnam, 1969) from Vietnam, we asked children to group animals together in workshops and tell us a story about what was going on, and then displayed those groups and asked children to draw them and make up their own stories, creating a new narrative [FIG. 12]. This workshop was about multiculturalism and cross-cultural studies, but also about matching text with image.



FIG. 7 Yayoi Kusama, *The obliteration room* / Kids' APT4, 2002



FIG. 8 Khadim Ali, *The Bamiyan drawing project* / Kids' APT5, 2006



FIG. 9 Billboard painter Sirous Shabaghghi creating the mural in Iran / Kids' APT6, 2009



FIG. 10 Isabel & Alfredo Aquilizan, *In-flight (Project: Another Country)* / Kids' APT6, 2009



FIG. 11 Daniel Boyd, *History is made at night* / Kids' APT7, 2012



FIG. 12 Tiffany Chung, *One day the bird flies across the sea* / Kids' APT7, 2012

This is a fantastic multimedia project by Parastou Forouhar (b. Iran, 1962) (FIG. 13). Farsi script in Iran, often in the shape of the text, embodies a full word, and the children are able to draw on the screen, altering the Farsi script until they have made an animal that the script says, and then they can e-mail it to themselves or to their friends.

We will finish with Iwasaki Takahiro (b. Japan, 1975). Obviously you are aware of Iwasaki's practice; he uses very delicate materials like strands of hair, or cotton threads, bits of dust particles and he makes exquisite miniature replicas of landmarks and urban buildings. And it teases out the idea of a viewer's visual perception. So we have discreetly placed some of those around the gallery and put telescopes up for children to see them through (FIG. 14). The focus is on what you look at as much as how you look at it. The focus is on out of sight everyday materials that are transformed by creative process.

You can see that the museum does not tell the artist what to do. The artist tells the museum what to do. We test that with children, they tell us if that is going to work, and then we all work together across a lot of departments to make it happen. Not all artists want to work with children's projects and that is fine. But there are plenty who do, and we love them. Thank you.

Hoashi | Thank you. The presentation has provided us with a concise introduction to the children's program at APT.



FIG. 13 Parastou Forouhar, *Persian for kids* / Kids' APT7, 2012



FIG. 14 Takahiro Iwasaki, *Out of disorder (under construction)* / Kids' APT7, 2012

Part 2

Introducing Education Programs in Yokohama

“Yokohama Triennale and Yokohama Museum of Art”

Hoashi | Next, we would like to introduce the educational programs that take place in Yokohama.

By the way, we are here today, not to compare notes to decide on which education program model is better, but to understand what kind of possibilities are available, if such programs are possible, and how we can benefit from them.

Yokohama Triennale was inaugurated in 2001 and has so far completed four editions, including the ones in 2005, 2008, and 2011. In the last edition in 2011 (“Our Magic Hour”), included artist like Iwasaki Takahiro. We have been able to attract 350,000 visitors in the first edition, 190,000 visitors in the second, 550,000 visitors in the third, and 330,000 visitors in the fourth edition.

For the last fourth edition, in which we put “See, Nurture, and Connect” as core values, we were conscious about what to do in order to actually “nurture” our audience and program.

As a result, we ran the Kids Art Guide program, in which children did a guided tour to the visitors. We are now evaluating this program while looking for ways of running such programs. In particular, we would like to either consolidate or to complement our program, and utilize the resources and knowledge available in the existing studio programs, Citizen’s Workshop and Children’s Workshop, which has 24 years of history at the Yokohama Museum of Art. This is why we were interested in the Kids’ APT model which is a program ran during the APT, but which is based in a museum.

Our colleague will now introduce you the studio programs at the Yokohama Museum of Art.

Seki Junichi [Sekij] | My name is Seki Junichi and I am in charge of the education department. Since Wright-san is here today to talk about APT, I would like to share the kind of programs we run at the Yokohama Museum of Art, so that we can together think about how we could utilize the educational resources in the museum for the Yokohama Triennale.

It is now 24 years since the inauguration of Yokohama Museum of Art, and from the beginning, we have held programs that introduce the process of the making of art, including meeting artists, producing and creating artworks, to those who are age 12 and over, and children under age 12. The former is called the Citizens’ Workshop and the latter is called the Children’s Workshop.

In the Children’s Workshop, the focus is on nurturing the minds of the children through creative activities while developing future audience by becoming familiar with the museum environment.

We also have programs for schools and individuals. Starting this year, we have a new program for art appreciation, so we will be integrating that with the current programs.

This is a photo of a workshop when we had children watch a professional printer demonstrate his skills during the special exhibition, “The Spirit of KUNIYOSHI—From Ukiyoe to Japanese Modern Paintings,” which exhibited a collection of Japanese woodblock paintings [FIG. 15]. The children took turns to experience printing, and then went to see the print works. We prepared stools so that children could see the works at the right height.

During the summer, we usually host the Kodomo Festa, which invites children with homework to visit the museum during the summer holidays. We involve the educator, volunteers and also teachers volunteers to guide the children through the museum. We provide information on the material and other features of the artworks when we interact with the children so that they are prompted to see the artworks closely. We encourage the children to hold their own opinion, and to think about the artworks in their own ways. During this time, we also organize gallery tours for students of school art clubs and individuals who are interested. We involve school teachers and students who are particularly interested in art, so that we can network with school and expand our museum programs.



FIG. 15 Special Exhibition Class for children and families
“Children meet Ukiyoe Printer”
Ukiyoe Printer: Hayashi Yusuke

Part 3

Discussion

Hoashi | We have received many questions.

The first question is on QAGOMA and its relationship with schools, including the teachers, as well as those students who are not particularly interested in art.

Wright | We work closely with the school's community in a number of ways. In Brisbane, there is the Queensland Art Teachers Association. So we network with them quite closely.

I should also explain that the Children's Art Centre, organizationally, is separate to our education department. From the minute we decide to do a project, a committee will be formed and for the two hours that committee meets, we are all employees of the Children's Art Centre. Education will come, marketing will come, design and architects will come, artists will come, and curators will come. All of them will come to that meeting so that we are working together with a united purpose.

The staff from the education department, there are two full-time staffs, each having secondary and primary art teaching backgrounds. The two staffs in the Children's Art Centre have educational backgrounds as well. So we cross-fertilize.

What we are trying to do is allow a situation to unfold quite naturally in the museum space. For the upcoming exhibition, the floor plan is such that it will take a child who may think they're not interested to enter a space and, after a while, own the process of discovery. Some children who may want to make things will have four desks where they can work. Some children may want to perform and have themselves videoed, and there would be a corner for that, too. And then there is an arcade game section, which is an interactive educational project for children to engage with.

For example, for APT7, we offer 13 projects, 9 of which are in the Children's Art Centre, and the others are in the restaurant and throughout the gallery spaces. It's basically impossible for a child not to find something that they really enjoy.

Education Program in Relation to its Sponsors

So I'm showing you a plan for something that hasn't happened yet; this is a proposal for our next CAC project, a one-artist project. It will cost maybe 150,000 AUD to make, and we rely very heavily on going into the community and generating our sponsors, those people who would pay for these projects. The museum tends to pay for the staff and the publications and resourcing around it and the education kits that go out to schools, but we need money to make these things. So we have support from companies like Santos, the big mining company in Australia, and the Tim Fairfax Family Foundation, a very big private philanthropic organization.

The relationship with our sponsors is extremely important. Santos, for instance, operates in remote communities around

Queensland, and as we are not the "Brisbane" Art Gallery, but the "Queensland" Art Gallery, and we also deliver services into those regions. Tim Fairfax's family is involved in agricultural business throughout Queensland, so he also has a very big personal interest in servicing the regions. He supports us also to deliver projects and content from the regions to show in the city, but also to deliver them regionally. To give you an idea of the level of commitment that the Tim Fairfax Family Foundation gave us just towards APT7, it was over 300,000 AUD.

Hoashi | I would just like to add that Queensland is a state, like the Kanagawa Prefecture, and Brisbane is a city, like the City of Yokohama, so the outreach programs cover the wider state of which the museum is located.

Wright | The Children's Art Centre is free to the public. It is open seven days a week and is part of an overall integrated plan to deliver for young children. We look at two groups: kids with adults and school groups.

We conduct a lot of research with school teachers. We go into the classrooms and we work very closely with teachers and their students so that we get direct feedback. We also make sure, through our education department, that whatever we are doing is very closely aligned with the Queensland Government education curriculum.

Education and Staff Training

We also employ young contemporary artists who do combined degrees of visual arts and teaching at universities to be our attendants in the Children's Art Centre. They are not volunteers. It's another way that we stay in touch with what is being taught at universities about the curriculum development, and it also allows emerging artists to see with great excitement how children react to different situations and communicate about art; it's great for their own personal practice.

Hoashi | I would also like to follow up with another question on Children's Art Centre and the education department. You mentioned about the paid work for artists within your organization. What is your staff training scheme, including those for full-time educators as well as volunteers and other people who are not necessarily paid workers? And how do you build the skills of your full-time educators?

Wright | There is a volunteer program at the QAGOMA, but it is separate to the Children's Art Centre.

We feel we should employ young artists to provide services in the Children's Art Centre but also to train them for special circum-

stances whilst they are there. It's too much responsibility to rely on volunteers. Children are making things, sometimes in dangerous situations, with scissors or carving tools. So our curatorial staffs work with our education staffs and they brief our roster of 25 young artists who work in the Centre about each project.

Working with Schools and Educational Institutions

But we're only talking about the staff in the Centre itself. It's important that when we are working in the regions that the educational staff develop information sheets and contextual information to go with our touring exhibition product. For APT7, for instance, we are touring Kids' APT7 to 79 regional venues.

It presents a lot of complex challenges if you look at the map of Queensland; at the very tip of the north there is the Torres Strait Islands. Queensland is unique in Australia because it has an aboriginal population but also the Torres Strait islanders in the far north. So, the communities in the Torres Strait often identify more with Melanesia and Indonesia. Aboriginal people in the mainland are very focused on their oral traditions and personal histories, so we need to be very culturally aware of what we are taking to these regions and how we are communicating.

This is why, in our working committees, we have the curator of Aboriginal art, curator of Asia Pacific art, staff from the Children's Art Centre department, the education department, and myself to come together and unite around one project.

We train our staff. All of our staff receives a certain level of training, even volunteers, particularly around information for each specific project. But the volunteers also receive training in emergency management response, first aid, you know, the usual things. Where it gets trickier is the staff working in the Children's Art Centre; they need an accreditation that is checked by the police to make sure they are okay to work with young people, which has its own training requirements. But training itself is ongoing and regular, and our two education staff and our two Children's Art Centre staff are regularly meeting with the school teachers association and other professional organizations and keeping up to date with changes in curriculum.

The gallery invests heavily in professional development for its entire staff whether they are volunteers or young artists employed on a casual basis in the Children's Art Centre.

Gordon Hookey (b. Australia, 1961) is an Australian Aboriginal artist, who is very political. His work often talks about colonization and Aboriginal people having to move away from their homelands when settlement happened (FIG. 16).

Part of the curriculum in Queensland schools recognizes Aboriginal history, and they are seeking new ways to represent how this gets taught. Visually and orally, a lot of Aboriginal culture have transferred.

The teaching seeks to emphasize that there is not one Aboriginal person or people. There are over 700 language groups in Australia. Each identifies as a separate culture. Gordon Hookey's personal totem is kangaroo, while there are four different kangaroos in the project that we are going to do with him in the Children's Art Centre*.

* The "Kangaroo Crew" is an interactive project based on the children's book, *The Sacred Hill*, by Gordon Hookey

So using metaphor, we are going to tell the story of how Australia was settled. It was first occupied by Aboriginal people but then people came. There is an image in which the noisy myna birds have arrived and they have scared the four different kangaroos away from their sacred hill (FIG. 17).

So the little guy on the left, Treeza, or the tree-kangaroo lives in the green area in the trees, and the second guy, Rocko, is the rock-wallaby, so the seats around the making tables will be rocks. Potsy and Bluey, different kinds of kangaroos that inhabit the rocks and the flat areas, are also represented in the Children's Art Centre.

In keeping with the Queensland education department's curriculum, this story is ultimately about how the four kangaroos banded together and reclaimed the sacred hill and then lived with the myna birds. It is a story about reconciliation. Children will also learn about the different characteristics of the various animals and be asked to identify with them; strength, cleverness, eyesight, and the power to jump. They will be able to make activities and identify. This project has been researched very closely in two Aboriginal schools with feedback from indigenous teachers and students to make sure it is culturally appropriate.

Hoashi | Thank you for your presentation.

By the way, while you mentioned that the Children's Arts Centre is open seven days a week for free, I just wanted to mention that QAGOMA is also free.

I have received many questions, but among them, there were many which referred to the issue of evaluation and assessment, particularly on evaluating and assessing programs for children.

Evaluating the Program and Feeding Back the Results

Wright | QAGOMA is conscious about getting independent evaluation. We do our own measurement of numbers, which is easy, but the hard part about the quality of the experience is contracted to a London company, Morris Hargreaves McIntyre (<http://www.lateralthinkers.com/>). Morris Hargreaves McIntyre has worked with the gallery for a number of years to develop a very detailed set of questions for children, parents and teachers. And we make sure that a representative sample is taken for every project.

Between 50 and 100 evaluations are done every day. So it creates a big feedback loop; we can refine our processes and change our communication strategies even in the middle of an exhibition if we need to.



FIG. 16 Gordon Hookey, *Blood on the wattle, blood on the palm*, 2009

Hoashi | So, for quantitative assessment, you have a professional company to help you. What is the reason you decided to hire a third party company and what is your view on what they do?

Wright | I don't want to do a paid advertisement for them, but we recognize Morris Hargreaves McIntyre's skills in methodological framework for constructing questions that are unbiased. They have an excellent reputation in the industry. They tailor the specific evaluation to the museum and do not resell the same product over and over. Also, they are not just interested in what the gallery does but the context in which the gallery operates. So they will understand the Queensland Government's strategic objectives for cultural tourism, education outcomes, community development, audience development, and their evaluation will measure our success against those objectives.

Obviously we do self-evaluation all the time as well. We are looking at what our sponsors expect from us. Santos, the mining company, does not tell us how to spend their money but obviously they are working in a lot of regions around the state and they need to see how we work across the state. We like to involve the staff of the organizations that support us and offer our programs to their kids especially, but we also seek their feedback. And we are also dealing with schools that are constantly telling us gaps in the market for exhibition product.

Just to finish, I would like to mention that for different projects there will be specific sponsors like Tourism and Events Queensland or Brisbane Marketing. And they will need very specific information from us. So we are constantly evaluating against their expectations and sometimes where, for instance, a target is not met for audiences, we will not get the full sponsorship dollar. Because obviously these organizations want to know how many hotel nights people spend in Brisbane when they come to the gallery and how much they spend while they're there.

Hoashi | So, your evaluation is done with an understanding that you have corporate sponsors as well as the tourism sector involved.

My last question is on the role of the artist. The exhibition drives the increase of the audience, and the artists are the ones who make the exhibitions possible.

At QAGOMA, artists are those who exhibit, but also who work at the Children's Art Centre, and also get commissioned specifically for Kids APT. What are your criteria for selecting artists for the commissions? And how do you approach them? If you have any thoughts on working with artists in an education program context, please share your thoughts with us.

Wright | The best word is collaboration. I think in the process neither the gallery nor the artist would feel like they are on their own. All is very tightly worked out and communicated. We are doing projects with artists across both galleries, but we do not always do a solo project by that artist in the Children's Art Centre. In other words, we will do programing across both sites at the Queensland Art Gallery and GOMA, but not necessarily a project with that artist in this Children's Art Centre every time. We are looking for a lot of triggers in the work to extend into the Children's Art Centre. We do not want to change an artist's conceptual framework. We do not want to tell them what to do. We just don't do that. They tell us if they are not comfortable, because there are plenty of other opportunities.

One thing we have found for sure is that children, even at a very early age, can understand extremely complex ideas. And we do not want to dumb down an artist's practice. We just need to explain it in a certain way so that they understand the different layers in that practice and can unpack it for themselves across different activities.

We find the best projects are just simply natural extensions over an existing series, or idea.

Hoashi | Thank you for that clarification. With this final question, I would like to close this event.

By the way, the APT7 in Brisbane is open until April 14, 2013. I hope that some of you will be interested in visiting them after having heard about their program.

The Gold Coast may be the famous tourist destination in Queensland, but it may be good to know that, in Brisbane, there's another worthwhile destination; a museum which houses a collection of artworks from the Asia-Pacific region and organizes an interesting international exhibition once every three years.

Please give applause to Mr. Simon Wright. Thank you.



FIG. 17 Gordon Hookey concept sketch

Simon Wright

Assistant Director of Programming,
Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art (QAGOMA)

Simon Wright has held curatorial and management positions in private, commercial and public gallery and museum realms since 1993. Currently Assistant Director of Programming at Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art (QAGOMA), he is a former Director of Griffith Artworks + Griffith University Art Gallery, and curatorial consultant to private collections. He has developed over 200 exhibition and publication projects. He received a Museums Australia Gallery and Museum Achievement Award (2004-2005), a National Australia Bank Partnering Award [QLD] at the Australia Business Arts Foundation Awards (2006), and joined the Queensland Art Gallery Foundation (2007), and was appointed current position in November 2012. He was appointed a member of The Commissioner's Council for Australia for the 53rd Venice Biennale (2009) and served as a member of the 54th Venice Biennale Champion's Program for Australia (2011). He was a member of the selection committee for The Premier of Queensland's International Sculpture Commission, and continues on QCA Industry Advisory Board (2012).

© Image credits

FIGS. 1-14 (PP. 20-24), FIGS. 16-17 (PP. 27-28): Courtesy of Queensland Art Gallery / Gallery of Modern Art [QAGOMA]

FIG. 15 (P. 25): Courtesy of Yokohama Museum of Art

Audience Feedback

[No. of Audience] 67

[No. of Collected Surveys] 54

[Sex] M: 6 | F: 44 | N/A: 4

[Age] 19 & Under : 1 | 20s: 11 | 30s: 15 | 40s: 12 | 50s: 10 | 60s: 2 | Unanswered: 3

[Location of Residency] Yokohama City: 20 | Kanagawa Prefecture: 9 | Tokyo: 18 | Other (in Japan): 3

About the Event

- The discussion helped me understand how to connect contemporary art and children.
- I didn't know that a program like APT existed until I came here today. The story about the children's program broadening the access to art was, indeed, very plausible. I would like to take this knowledge back, and connect and art through my work as a school teacher.
- I learned a lot, especially how the museum, the schools and the artists are related to each other and how important the relationships are. I also learned which activities actually work and how children's programs benefit not only children, but also other visitors.
- It was interesting to learn how APT connects Australia's history and its people (Aborigini, etc.) to art.
- I was impressed with the steady growth of the audience number and the careful organizational structure that enabled its growth. I thought the QAGOMA's policy for volunteers, which is different from Japan, holds water.
- It was good that the thinking process behind the development of the program was shared in an open forum like today.
- It was good to learn about this good model along with the process that brought about its success. I hope that this event will help spread information on APT and art to a broader audience.

Comments on Yokohama Triennale in General

- It would be good if there is a corner dedicated to children.
- I hope that there will be more programs that connect children and art.
- I would like to see a guidebook for elementary and junior high school students, with a narrative which does not use complex words. It would be nice to see an interesting device (other than artworks) in the second venue that would draw people's attention to go.
- I hope you will reflect on today's discussion when you plan your future editions. I always bring my children to the Triennale, so I hope you can continue to build on this good foundation.
- I would be interested in a participatory program that provides tactile and interactive experiences.
- I am interested in artist's workshops.
- The programs should target people of all ages. Also, workshops and interactive artworks would the audience to engage more with art.
- The local community should be involved more.
- I want Yokohama Triennale to become a world-class event.
- If you could share the preliminary process of the event with the public, it may lead others to start a new art event or promote similar events. I hope you can become the forerunner and not limit yourselves to being local to Yokohama.
- It would be good if the exhibition would be accessible to both first-time and regular museum visitors.
- Identifying and thinking about issues do not come across as easy, but I hope Yokohama Triennale can provide an entry point. I am looking forward to the "entertainment" directed by Morimura Yasumasa, I hope you can make contemporary art accessible to a wide range audience.

Yokohama Triennale 2014 Pre-event
A Case Study on
Educational Programs of
Asia Pacific Triennial of Contemporary Art
in Australia

Kids' APT:
Connecting Contemporary Art
and Kids
Document

ヨコハマトリエンナーレ2014 プレイベント
オーストラリア発、国際展における次世代教育普及プログラムの事例紹介
「現代アートと子どもをつなぐキッズAPT」
記録集

発行日：2015年6月30日

編集・発行：横浜トリエンナーレ組織委員会

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 横浜美術館内

翻訳：田中 彩(英文和訳)、帆足亜紀(和文英訳)

写真(3-4頁、19頁)：加藤 健

デザイン：津山 勇

Date of publication: June 30, 2015

Edited and Published by: Organizing Committee for Yokohama Triennale

c/o Yokohama Museum of Art, 3-4-1, Minatomirai, Nishi-ku, Yokohama

220-0012 JAPAN

Translation: TANAKA Aya (English to Japanese),

HOASHI Aki (Japanese to English)

Photo (PP.3-4, P.19): KATO Ken

Design: TSUYAMA Isamu